

石 燈 籠

32期生

I テーマ設定の理由

去年もそうだったが、今年も自由研究のテーマ設定締め切り日の前日に決めたのである。ところで、なぜこのテーマにしたかと申しますと……。

締め切り日の前日、僕は、深夜までテーマのために悩み苦しんでいた。しかし、一向にテーマは、浮かんでこなかった。目はうつろ、首はだるい、腰は痛む、体はもう限界に近かった。そこで最後の力を振り絞り考えついたのが「風呂に入る、ということであった。なぜかといえば、風呂で温まることによって、少しでも疲労が回復すると思ったからである。そこで、ぼくは風呂場へ向かった。途中、廊下を歩いているときだった。なんの気なしに庭を見たとき、そこには光の反射で燦然（さんぜん）と輝く何かがあった。それが「石燈籠、なのである。入浴中、検討を重ねた上で、このテーマにしようと思ったのであった。少しおかげさだが、以上がテーマ設定の理由である。

II 研究方法

まず、行き先を決め実際に行く。それから、調べたことを参考文献を利用し、まとめる。これが計画である。

(1) 実地調査

北区内の石燈籠を調べる。

天満宮 太融寺 お初天神など

(2) 参考文献

日本の石燈籠（福地謙四郎著 理工学社）

石燈籠新入門（京田良志著 誠文堂 新光社）

III 研究結果

(1) 初めに「石燈籠とは」

石燈籠とは、神社、寺、庭などにあるもので、それらは、必ず石で造られてあり、かつ、点灯設備のあるものである。石燈籠は、目的などにより、いろいろな種類に分類できるが、この研究では、最も有り触れている、四角型石燈籠と六角型石燈籠を取り上げることにした。ここで、四角型石燈籠と六角型石燈籠を説明しておこうと思う。次のページの写真を見てもらえばわかるように、四角型石燈籠は、上から見ると、四角形（正方形）で、それに対して六角型石燈籠は、六角形（正六角形）である。ただ、これだけの違いだけである。



▲四角型石燈籠



▲六角型石燈籠

(2) 石燈籠の形

初めは、鎌倉時代ごろから後を取り上げようと思っていたが、なかなかそのような古い石燈籠がなく、江戸時代後を取り上げることにした。

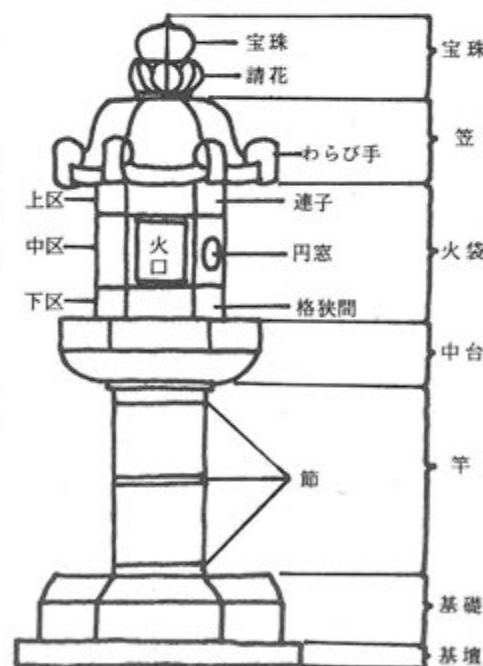
(1) 江戸期の石燈籠

江戸期の石燈籠は、全体的に見て、各部分が大きく力強いと思われる。とくに四角型を見ると、他の時代に比べ、直線的で鋭く上がった感じだと言える。

② 四角型

四角型としての特徴は、前に述べたように、直線的ということが言えると思う。まず、笠について言うと、江戸の初期～中期のものとは後期のものでは、少しながら違いがある。〈図2〉を見てもらえばわかるように、初期～中期のものは、笠の先がとがっていない。それに対し後期のものは、先が鋭く上がっている。なぜ、同じ江戸時代でこ

<図1>



石燈籠の構成と各部名称

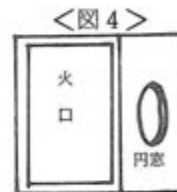
のような違いがあるのかは、よくわからない。僕の考えでは、一種の流行のようなものだと思っているが、みなさんは、どのように考えますか？



① 六角型

江戸期の六角型といえば、だいたいのものが竿で判断できる。なぜかといえば、

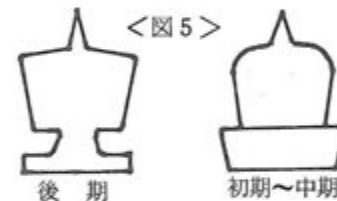
<図3> <図3>のように、竹の節型になっているからである。とくにこの形が多い時期は、江戸後期である。その他の特徴といえば、<図4>のように、火口の右側には、必ずといってよいほど円窓がくるということである。この円窓は、単なるはやりの飾りにすぎないと思う。



江戸期の六角形を見て思うことは、美しさよりむしろ巨大な偉容を誇ろうとしていると思う。また、これが江戸期の特徴だと言えるのではないだろうか。

② 四角型と六角型の共通点

第一に宝珠がいえる。<図5>のように、初期～中期と後期とで形が異なってくるが、それぞれの形は、時期により一定しているようだ。また、中台についてだが、



たとえば鎌倉時代のように、江戸時代より前の時代の場合は、<図6>のようにならず、模様は切れているが、江戸時代以後の場合は、ほとんどが<図6>のようにつながっている。

共通点というものは、どのような形にでもあうように、バランスよく造られているものだと思う。

(2) 大正～昭和期の石燈籠

大正期、昭和期とも、江戸期のものとあまり形の変化はないようであるが、変化したところと言えば、鑑賞用としての使用が多くなったため、今まで以前の時代の形をバランスよくミックスしたことだと思う。そのため、形が豊富になったことがいえるだろう。

(3) 石燈籠はどこに用いるか

今回は、四角型と六角型を調べたわけで、もともとは、鑑賞用としてはあまり使用されていない石燈籠である。しかし、先ほどにも述べたように、昭和になってからは鑑賞用として使用されることが多くなった。それでは、普通はどこに用いるかということ、寺社の献灯や照明器具として用いるわけである。道標として、道路わきに立てることもあるようである。



▲ 献 燈



▲ 鑑 賞 用

IV 結 論

この研究の結論といってもよくわからないが、僕自身この研究全体が、新しい発見だったので、ここに書かれてあるすべてを結論とする。

V 総 括

今までにこのような研究をした者がいなく、何かからとりかかれればよいのかよくわからなかった。しかし、やり始めてよくわかった。*どんなものにも歴史がある、ということだ。この一言がよくわかり、この研究をして、ほんとうによかったと思っている。

反省としては、参考文献に頼りすぎたことだ。来年は、自分で作る研究をしようと思う。